

C・K・ヤン著

『中共社会——家族と農村』

C. K. Yang, *Chinese Communist Society: the Family and the Village*, Cambridge, Massachusetts, The M. I. T. Press, 1965, 246+276p.

I

本書は、それぞれ別箇の書物として、『中国革命の過程の中国家族』(*The Chinese Family in the Communist Revolution*)、『革命初期における中国農村』(*A Chinese Village in Early Communist Transition*)という標題のもとに同じく M. I. T. Press から1959年に出版されたものを、今回あらたに1冊の書にまとめ上記の標題を付して出版されたものである。本書の内容も、前2著のうち一部人民公社に関する記述を削除しただけでそのままとられており、あるいは書評としてとりあげるには適当でないかもしれない。しかし、本書の内容は今日においても十分有用であるし、にもかかわらず本書がわが国の中国研究者のあいだで案外知られていないように思えるので、あえて書評でとりあげることにした。

というわけで、本書は1冊の書の体裁をとってはいるものの、事実上は2冊の書よりなる。しかし著者がその序言でいうごとく、中国の伝統社会を特徴づけるものの中に家族制度と郷村があり、中国社会のいかなる重大な変革もこの両者を含むことになるのであるから、著者が意図する中国革命のもとでの中国社会の急激な変化を理解するためには、この両者をしかも一体として考察する必要がある。そういう意味では、2書は当然1冊にまとめられるべきものであるともいえる。

本書の前半部分は、中国の家族制度が中国革命によっていかなる変容をこうむったかを追求しようとするものである。これを理解するためには、当然過去における中国の家族制度とその崩壊の過程の考察がなされなければならないであろう。

後半の部分は、広州近辺の一農村のいわゆる解放前の社会・経済的構造(第1部)と、解放直後の数年間の変革(第2部)が著者の field study に基づいて述べられている。これに農村共同体の変革が第3部として加えられている。以下、本書の前半部分と後半部分についてそれぞれ簡単に内容を紹介し、若干のコメントをしたい。なお著者については、ハワイ大学の Social Service Ins-

tute に所属するということを書きによって知るのみである。

II

最初に著者は中国の伝統社会における家族および親族制度の機能および構成について略述し、厳格な家父長制的支配と性と年齢に基づく階層を特徴とする家族制度が、すでに前世紀後半から西欧思想のインパクトと近代産業の影響によって崩壊の過程を歩みはじめたこと、中国革命による家族制度の変革も結局は長期にわたる著者のいうところの「家族革命」(Family Revolution)を拡大し、促進したにすぎないといった見解を示す。

さて、家族革命の中心をなすものは、婦人の地位の向上であり、年齢によるヒエラルヒーの瓦解である。そこで著者は、まず結婚、離婚、再婚の実状とその変容の過程、ことに解放以後の変革——婚姻法(1950年5月公布)の実施をめぐる生じた問題についてはかなり詳細に論じている。党の宣伝、これに反対する側の抵抗(農村における一部の党员や幹部の抵抗を含めて)、離婚のゆきすぎ等の多数の事例が示されている。しかし種々の混乱を伴いながらも、結婚の自由や離婚の自由は、解放前これが都市の上・中流層の一部にのみ浸透していたにすぎないのに比して、解放後は都市から農村へ、上・中流層から一般大衆の間へと普及していったのである。著者は、結婚および離婚の自由が伝統的な家族制度の解体とそれに変わる新しい家族制度の発展の最も重要な要素であるとして、その影響を要約する。(1)家族の世代構成が夫婦中心へと変化、(2)家族規模(大家族の場合)の縮小、(3)伝統的な家族の結合力の弱体化、(4)血統の継承への関心が薄れること(pp.82~85)。

つぎに、中国の家族の伝統的な年齢によるヒエラルヒーの崩壊と青年の地位の向上について、また中国新民主主義青年団、全国民主婦女連合会の果たした役割について述べている。

ところで、伝統的な中国の家族制度は、解放後の農業集団化、企業の国有化(または公私合営化)によって、その経済的基礎を根底からゆさぶられた。過去において中国の家族制度が種々の矛盾をはらみながらも牢固として存在しえたのは、家族が生産の単位であり、したがって生活の単位であったこと、各個人は家族によって集団的に生活の保証をえ、家族はそれのみでかなり自給自足的な経済を営んでいたがためである。農業集団化および企業の国有化は、家族の主要な生産単位としての意義を

失わせ、かくて家長の経済活動における指揮者、組織者たる地位をも失わせた。また生産活動において個人の労働が評価されることになり、婦人や青年の家族内での地位も向上した。

つづいて著者は、諸個人の忠誠 (loyalty) の対象が、過去における家族から国家やその他の社会組織へと移行したことを、伝統的な家族に神聖な性格を付与していた祖先崇拜の儀式的衰退等について述べている。

農村における家族は、その属する宗族のメンバーとしてのみ存続しうるといえる。家族は宗族のいわば「細胞」なのである。ここでは宗族の組織および機能、さらに解放後の宗族の崩壊について述べる。土地改革によって宗族は経済的基礎を失い、その主要な経済的機能である灌漑や水の管理、道路の建設・維持等の機能はもはや宗族に属さなくなった。また家族における同様に、宗族組織の基礎をなしていた年齢によるヒエラルヒーと血縁による親近性も、旧家族制度の衰退によって失われていく。

ところで伝統社会の破壊は、社会制度に関する新しい創造的な概念を伴うことなくしては、新たな制度の発展は望みえない。そこで家族制度の変革にかかわるイデオロギーとプロパガンダの役割がとかれる。

最後に著者は、1953年以降「家族革命」が退潮期にはいり、その間、婦人に就業の機会が十分に与えられなかったがために生じた種々の問題について述べ(第2次5カ年計画期前)、また婚姻法や新しいイデオロギーも、家族制度のあり方について必ずしも明確な方針を示していないという。ついで、家族制度の変革に対する著者の視角が示されている。すなわち、長期的にみて最も重要なことは、家族制度が社会において支配的であること、絶対主義的な社会主義のもとでの近代的な産業社会の基本的な特徴が両立しないということであると。家族制度のごとく多数の小さな半自律的、かつ相互に排他的な血縁集団よりなる社会構造は、高度に中央集権化された支配を行なう統合化された大衆社会(ここではすべての構成要素を個人レベルにまでさかのぼって調整する)とは矛盾するという(p.218)。

III

後半部分は、著者が広州郊外の一農村(Nanching)で1948年から1951年までに行なった実態調査に基づいて書かれたきわめてユニークな報告である。その第1部では解放前のこの村落の実状が示される。その主要項目はつ

ぎのとおりである。まず広州から5マイルの地にあるという村落の概観、ついで人口構成、土地利用状況、土地所有と小作の問題、生産、消費および副業収入、親族制度、権力構造、階層の固定性と階層間移動。

この村は、その地理的位置からして、都市の経済的・政治的影響を受けやすく、その意味では中国の農村の中でも特殊なケースであるといえなくもない。この村は肥沃な珠江デルタに位置し、年に2回収穫される米が主たる生産物であって、他に都会向けの蔬菜(主としてニラ)を産する。

村の人口は約1100人、230戸(ただし非農業30戸を含む)よりなる。耕地は1200華畝(1華畝は日本の6.2畝。以下同)、1人当たり耕地面積は1.08華畝というから、人口圧力がきわめて大であることはいうまでもない。耕地はデルタを囲ってできた土地、水を引いて灌漑可能な土地および高地の3種に分かれる。すなわち全耕地の3分の2に米、3分の1に野菜を栽培している。労働生産性が低いために、たとえば夫婦2人で耕作可能な耕地面積は6畝にすぎないという。

村の耕地の6.2%、約80華畝が宗族の共同所有地(付近の農村では平均30%)、93.8%が私有地である。土地所有の状況についていえば、30華畝以上の土地を有する5戸の地主が全耕地の25.8%を所有し、一方全然土地をもたない農家が20戸ある。両者の間にあっては、富農で5~10華畝、中農で3~4華畝、貧農は1華畝未満から2華畝を所有し、それぞれ25、70、100戸を占める(ただし、富・中・貧農の別は所有地+小作地で考慮されている)の全耕地の70%が賃貸され、30%が所有者自身の耕作。小作料は土地によって違うが、収穫高のおよそ43%ぐらい(中位の土地)である。

以上の状況からも推察できるように、ここでは中農でさえも最低生活に必要なだけの収量をあげることができない(著者は1人当たりの年間の食糧消費量にその30%を加えたものを最低限としている)。したがってそこに生ずる不足分は、野菜の栽培(米作よりも有利)、都市への出稼ぎ、その他の副業収入にたよらねばならないのである。

つぎにこの村の家族、および宗族の生活について述べる。この村は二つの大きな宗族と三つの小さな宗族よりなる。先の2大宗族が村人口中圧倒的多数を占め、村を支配している。

この村の家族もまた年齢と性の別によってヒエラルヒーが形づくられ、儒教思想が深く浸透している点は、他

の中国の農村と異ならない。また家族の財産が集団所有とみなされ、女子には相続権がなく、男子の子供の間では均等に相続される点も同様である。ただ、解放直前においてすら個人の保護に関する国民党の法規がほとんど実効をもちえなかったことは、この村が大都市に近く位置しているだけに注目されることである。宗族については、いわば決議機関である長老の会議と執行機関である事務の管理人等の機関、祭祀を行ない、宗族内の秩序を維持し、対外世界との折衝にあたり(納税など)、治水灌漑、学校経営を行なうなどの機能も、華南の他の村落とそれほど異なるわけではあるまい。

この村が長く国民党の行政機構のうちに組み込まれていた(末端では保甲制度)のは当然であるが、この村の平和と秩序の維持が、そうした正式の機構によることなく、実質上は親族制度と非公式な権力機構に依拠しなければならなかったことが指摘されている(p.105)。そして村における権力の所在として、宗族のほかには富裕な家族、自衛団、異なる宗族間の同年輩者で組織される友好団体、獅子舞のクラブ、かつての秀才に似た地位を占める地方政権と特殊な関係を有する者があげられている。

階層間移動については、貧農から、中・富農への途がきわめてきびしく、ことに農耕のみにたよってはほとんど不可能なことを指摘する。

以上が著者が解放前の調査によってえた結果であるが著者は、解放直後の数年のこの村における革命の過程をつぶさに知るといふ幸運に恵まれたことによって、この報告はおそらくは他に例をみない貴重なものとなっている。

最初に、土地改革の第一歩としての「階級闘争」の展開について述べ、その間に現われた階級決定にみられた矛盾、革命後の新指導者が中農から選ばれた事情についても語っている。土地の没収は中国共産党の決定に沿ってなされるとはいうものの、細部は当然各地区の実状に応じてなされなければならないわけである。土地の再配分をめぐる多くの困難な問題についても具体的に述べている。

一応土地改革が実施されたからといって、農村の経済事情が一挙に好転するというわけのものではない。たとえば、農業生産性は貧農の資金不足と富・中農層の動揺によってそれほどの変化をみなかったし、小作料がなくなったとはいふものの、農業税および地方税は収穫物の30%にも達したという(幹部等の競争のために実際に規則できめられたものをはるかに上回った)農業生産は、野

業収入の減少のために(革命による市場喪失等の理由で)むしろ全体として低下し、消費の面でも、高率の税が解放前の各種税および地主が小作料のうちから都会にもちだした部分を上回ったために、全体として減少した。著者も貧農が農業生産より得る収入が解放前より若干上回ることを認めるものの、それでもなお生存のための最低水準には達しないという。農業金融の不足、副業収入の減少、都市への出稼ぎができなくなった点を考慮に入れば、生活はきわめて不安定な状態にあったという。

農村における権力機構の改革は、まず保甲制度の廃止にはじまり、農村において実際の権力を握っていた非公式の権力機構の破壊へと進んだ。従来のそれらに変わるものは、新たな地方政府であり、共産党であり、農民組合、民兵組織等である。ここで注目すべきことは、それまでは半ば自律的な集団であった村を国家権力機構のうちに統合化し、組織化された共産党支配が、従来の非公式の勢力間の均衡といった権力機構を単一の権力中心をもつ権力機構へと変革したことである(p.174)。

土地改革による宗族の共有地の没収は、宗族の経済的基礎を奪い、農村における新しい権力機構の出現によって、宗族はその権威を失った。さらに「階級闘争」は、血縁関係に基づく結束を破壊した。つづいて、教育、宗教、イデオロギーの変革をとりあげる。この村にも道教の僧侶がいたが、宗教は、人数、組織、追隨者において、とても共産党の圧力に抗しうるようなものではなかった。ここで、著者が解放前に行なった儒教、民主主義、共産主義についての農民の知識の興味ある調査結果が示されている。共産党の思想工作、かつての農村指導者の思想改造、若い活動家の思想教育、農民組合や新民主主義青年団における教育について述べている。

第3部は、農業集団化の過程の諸問題である。ただしこの時期には著者はすでに大陸を離れており、主として中共の出版物に依拠しての研究である。

まず互助組から合作社への過程、ついで合作社における経済的な諸問題である。そこでの結論は、合作社化は確かにある地域の、あるレベルの農民の所得を増加させたが、農民の多数はなお最低限の経済的要求をみたしえないでいる。そうして、農民中20~30%はかなりよい中農の生活を営み、15%はなお寒さと飢餓に苦しんでおり、残りの大多数の者はその中間にあるという。

農業協同化に伴う組織上の問題について、これまで家族、所有地に関心が向いていた農民を、集団の個人的な

感情に捉われない専門的な活動に適応させる問題、指導者の官僚主義の問題、簿記および計算制度が欠けている問題等多数の困難な問題を指摘し、さらに重要な問題としてつぎの点を指摘する。合作社の有効な管理のためには、義務と報酬に対する個人的な感情に捉われないビジネスライクな態度を必要とするが、古い家族制度にあっては、義務と報酬は身分制度によって決定され、人の生涯を計算の基礎とした。しかるに個人的な感情をぬきにすることが要求されるようになると、従来は仕事に対してただちに反対給付を要求することが「暖い感情」を損うものと考えられていたのが一転して、合作社の共通の利益を無視して自己保存のみをはかるようになるという。農業集団化の問題に関する著者の結論は、細分化された土地、遅れた技術、小作料等の問題の解決には、なんらかの組織の再編成が必要であり、そのためには土地、資源、労働力等をプールする必要があるが、その場合には、集団化の正しい形態と有効な過渡期の戦術がかぎになるという。

IV

本書の前半部分、「中国革命の過程の中国家族」に寄せた序文で T. Parsons は、本書における Dr. Yang の二つの目的、すなわち家族についての社会学的貢献と中国革命の背景への理解を高めるといふ目的は十分に達成されていると評している。後者の目的については、家族（制度）の根本的な変革は共産党の創始になるものではなくて、変革への動向は共産主義者の運動以前から旧社会に深く根差しており、共産主義者は変革をいっそう促進し、援助したにすぎないというのが Dr. Yang の命題である。しかし、こうしたことを強調することは、アメリカ人読者にとっては必要であるかもしれないが、日本人の目からみればむしろ当然すぎることであろう。にもかかわらず、解放後の中国の家族制度の変革の問題を総合的に論じた書物がきわめて乏しい現状では、この書はそれなりの稀少価値をもつてあろう。前者の社会学的な貢献とは、家族を構造的な型として静態的に把握するのではなくて、その均衡の諸条件の動態的な分析へと一步を踏み出したというのである。しかしこの点については著者の社会学的な方法というものを中国家族の具体的な分析に先だって提示する必要があったと思う。本書の随処に Parsons の用語に依拠した分析がなされているが、本書の全体がこうした理論的枠組によって構成されているわけではなく、唐突の感を免れえないのである。また

中国共産党の政策は、周知のようにマルクス・レーニン主義に依拠して長期的な展望をもって展開されている。著者はマルクス・レーニン主義の方法をとらないにしても、いわゆる「近代化理論」につながる著者の方法からして、中国共産党の政策をどう考えるかについて、なんらかの説明がほしかったと思う。さらに欲をいえばソ連や東欧の社会主義国についての参照が全然ないのも残念であるが、そこまで望むのは無理というものであろうか。

以上は本書の前半部分に関するコメントであるが、方法の問題については、ほぼそのままの評言が後半部分「革命初期における中国農村」にもあてはまるであろう。しかしなんといいても、すでに述べたごとく、この部分が解放の前後を通じて著者が行なった field study に基づく報告からなっている点に、ほとんど他に例をみない特色をみることができよう。現在の、そして将来の中国革命の進展を理解するにあたって、今日でもなお本書は有益なる示唆を与えるであろう。ただし、本書に示される調査の対象が、広州に近い一農村の、しかも解放直後の数年の変革に限られているという点を忘れてはなるまい。また本書全体が、第2次5カ年計画期の開始前までの時期しか扱っていないのが惜まれる。人民公社化に代表されるその後の中国社会の変化に関する著者の見解を知りたいと思うのは、評者のみであらうか。

(海外派遣員 小林弘二)

— 在香港 —